

保育所実習（保育実習Ⅰ）と保育実習Ⅱの 実践的な学びによる教育的効果

—— 2006年度から2008年度までの保育所実習（保育実習Ⅰ）と
保育実習Ⅱの自己評価と現場評価の調査結果をもとに ——

児童学部児童学科 佐野美奈

抄録：保育園実習における学生の様々な学びについて、これまで自己反省報告文書等の分析結果から、特に本学の学生に関しては保育実習Ⅰで自己評価が高いことがわかってきた。それは、学生自身の実習における学びの意識を反映するもので、実際の保育実践の結果に対する評価ではない。

この研究の目的は、2サイクルの2回の実習で保育所実習と保育実習Ⅱにおける現場評価と自己評価の比較分析を通して、保育園での実践的な学びが学生にどのような教育的効果をもたらすかについて考察を加えることであった。2サイクルの2回の実習に関する調査結果は類似しており、主に2007-2008年度の保育園実習2回分に関する自己評価と現場評価の変化の諸相について分析することを通して、保育園実習の教育的効果について明らかにしようとした。その結果、2回の実習に関する学びの相違、学生の目的意識の明確化による評価の変容が見い出された。

キーワード：自己評価、現場評価、保育園実習、教育的効果

I 調査研究の背景

これまで、保育所・保育園の実習における学びの考察は、保育士養成校において多く検討されてきた。それは、学生の学びに対する意識の変容やその学習効果に着目されてきた（佐野 2008）。近年では、見学観察実習における学生の学び（中津、神林、松田 2007）、学生の「保育の質」に対する意識の変容（佐藤匡 2005）、実習を通じた学生の自分理解（加藤 2008）、学生の実習前後での意識の変容（飯野、七木田 2008、斎藤、大木 2008）といった学生の学びの中に見られる省察の過程を捉えた研究も見られる。また、保育実習指導の現状把握をミニマムスタンダードとの比較検討を通してなされた研究（榊原 2007、相浦、高濱、那須、原、野中 2008）、部分実習への指導方法（山田 2008）、といった指導の内容を深める試みも見

られる。同時に、保育実習現場評価を中心とした現状の考察を通して実習教育のあり方を検討しようとする研究（大森 2007）が挙げられる。評価については、2度の実習における自己評価の考察（松本 2008）、保育実習の前後での自己評価の比較（岡本 2005）、実習日誌の記述による学生の学習過程の深まり（権藤 2007）が挙げられる。学生の自己評価と現場評価については、実習における社会性のスキルを問うもの（岡本 2006、松本 2007）等が挙げられる。しかし、それらの先行研究では、保育園実習での自己評価と現場評価を複数年度に亘って検討されているわけではなかった。

筆者は、保育所実習と保育実習Ⅱを経験した学生にかかわる評価を比較検討することで、それらの実践的な学びによる教育的効果がわかってくるのではないかと考えた。そこで、本学の保育園実習における学生の学びを知るために、保育所実習

(保育実習Ⅰ)についての自己評価と現場評価の比較分析、保育実習Ⅱについての自己評価と現場評価の比較分析を行ってきた。2006年度から2008年度まで、保育所実習は2年時の8-9月に、保育実習Ⅱは3年次の年度末2-3月に実施されてきた。学生による自己評価と現場評価について、保育所実習(保育実習Ⅰ)と保育実習Ⅱのどちらも実習終了後の学生の自己反省報告文書作成による資料、現場による同じ様式の実習評価表をデータとして同様の集計分析手法を用いたり。そして、同じ項目や視点から、実習評価の捉え方を検討してきた。その結果、保育所実習(保育実習Ⅰ)と保育実習Ⅱでは、保育者としての基本的態度を習得することに際して、学生にとっての実習評価の意味も変わってきていることがわかった。

こうしたことから、2006(平成18)年度に保育所実習を受講し2007(平成19)年度に保育実習Ⅱを受講した学生と、2007(平成19)年度に保育所実習を受講し2008(平成20)年度に保育実習Ⅱを受講した学生にかかわる評価や学びの意

識を比較することを通して、2回の保育園実習による教育的効果について考察したいと考えた。

Ⅱ 保育所実習(保育実習Ⅰ)と保育実習Ⅱの実習評価に関する比較調査について

1. 比較調査の目的と方法について

2006(平成18)年度、保育所実習(保育実習Ⅰ)の実習先は、近畿圏の64園で、対象学生数は144名であった。2007(平成19)年度、保育実習Ⅱの実習先は、近畿圏の46園で、対象学生数は107名であった。また、2007(平成19)年度の保育所実習(保育実習Ⅰ)の実習先は近畿圏の64園で対象人数は137名であった。2008(平成20)年度の保育実習Ⅱの実習先は近畿圏の53園で対象人数は121名であった。これまでの調査では、実習の自己評価表25項目と学生の自己反省報告文書項目に対する回答を現場評価による実習評価表の視点によって分類要約して検討してき

1) これについては、佐野「保育所実習(保育実習Ⅰ)における実習評価に関する一考察-現場評価と自己評価の比較分析を通して-」人間科学部研究紀要第7号(2008)pp.131-147の文末に実習評価項目や自己反省報告文書の項目について示した。それによれば、保育所実習・保育実習Ⅱ終了後の学生の自己評価項目は以下の通りであった。

1. いろいろなことに気づくことができた。2. 落ち着いて子どもといっしょにいられた。3. 落ち着いて子ども達の前に立つことができた。4. まわりの子どもや先生との関係を意識して、立ち方の工夫ができた。5. 子どもからはたらきかけを十分に受け止めることができた。6. いろいろな子どもにはたらきかけることができた。7. 子どもの目の高さを意識して振舞うことが出来た。8. 子ども達と一緒に楽しく遊ぶことが出来た。9. 子どもの遊びに参加しながら、まわりの動きにも関心を向けることができた。10. 私がかかわって、子ども達の遊びを発展させることができた。11. 分からないこと、不確かなことを自分から質問できた。12. 思い切って自分を表現することが出来た。13. 自分から進んで役割を見つけて行動できた。14. 「今だな」と思って行動に踏み出すことができた。15. 子どもの遊びの予想を超えた変化にあわせてかかわることができた。16. 子ども達の物の取り合いやいざこざの場面で、適切にかかわることができた。17. 子どもにかかわるときに、いろいろなかかわりかたがあることを意識して、工夫できた。18. 場面を設定したり、遊具を生かしたり遊びを発展させることができた。19. 子ども達にわかりやすい声の出し方、スピードで話ができた。20. 子どもをひきつけるような振る舞いができた。21. 一人一人の子どもにかかわっているとき、クラス全体の様子も同時にとらえることができた。22. 子ども集団全体を指導しているとき、一人一人の動きがとらえられた。23. 子ども達が今取り組んでいる活動の充実を大切にしながら、次の活動の方向性を出すことができた。24. 責任実習(まとめの実習)で、子ども集団が楽しく、充実した活動が出来た。25. クラス集団の方向性とは異なる動きをする子ども達も大切にしながら集団の運営ができた。(日吉佳代子 p.145 参照。)

た。そこで、5段階の現場評価「実習中の態度」「指導能力・援助活動」「保育者の資質」「実習ノートの記述」「総合評価」の項目に基づいて個別データを収集した。その際、現場評価の相当項目に自己評価25項目の各項目が分類された。これらと比較考察することによって、学生の学びの意識や現場評価がどのように変容したか、また現場の指導保育士の評価の視点がどのように変わったのか、両者の意識のずれはどのように変容したのかを探ってきたい。その中から保育園実習の評価と学びとの関係を考えていく手がかりが得られるであろう。

2. 結果と考察

(1) 自己反省報告文書による学生の意識の変容

自己評価に関する実習の目標は、「①園の方針や一日の保育の流れを知ること」「②保育士の仕事内容の体験学習」「③子ども理解を深めること」「④園の環境構成を知ること」「⑤子どもへのかかわりと問題の対処の学び」「⑥保育方法と技術の学び」「⑦職員との人間関係や保護者とのかかわりの学び」「⑧地域社会における園の子育て支援の役割を知ること」であった。これらに関する学生の自己評価は、保育所実習も保育実習Ⅱも5段階評価の4点にほぼ集中しており、各自の目標はよく達成されていると捉えられていた。

次に「実習で良かったことは何か」について、保育所実習でも保育実習Ⅱでも最も多く取り上げられたのは、「子どもとのかかわり」を経験できたことである。保育所実習では次に「保育の仕事理解」「子どもの発達理解」「積極性」「公平な態度」「保育の一日の流れを知ること」などの順に挙げられていたのに対して、保育実習Ⅱでは「積極性」「楽しさ」「子どもの発達理解」「子ども理解」「保育実技経験」「設定保育」「冷静さ」「行事への参加」等、保育実践のより具体的な学びが挙げられていた。

「実習で困ったこと」は、保育所実習でも保育

実習Ⅱでも「子どもへのかかわり」「子どもの葛藤時の対処」が多く挙げられていた。保育所実習で次に「実習ノートの書き方」「保育技術不足」「積極性の欠如」「子どもの発達理解の不足」が挙げられているのに対して、保育実習Ⅱでは「体調管理」「実習ノート」「設定保育」「指導者への質問」といった順に挙げられていた。

さらに、保育活動を担当した子どもの年齢とクラス規模では、保育所実習で10人前後の0歳児から2歳児が大半を占めるのに対して、保育実習Ⅱでは20人以上30人未満の2歳児から4歳児が多かった。それは、2007年度（保育所実習）と2008年度（保育実習Ⅱ）、2006年度（保育所実習）と2007年度（保育実習Ⅱ）は類似した結果となった。

実習で任された保育活動の内容は、保育所実習では指導担当保育士が席を外した時や日常生活の短い場面での「絵本読み（34%）」や「手遊び（23%）」をはじめとして「歌・ピアノ」「ゲーム」「紙芝居」等が続いている。それに対して保育実習Ⅱでは、短い時間での「絵本読み（33%）」「手遊び（19%）」「ピアノ」「紙芝居」「ゲーム」に加えて、「設定保育（17%）」が増えていた。

実習記録や保育指導案は、2回の実習ともに約6割の人が良く書けたと考えていた。保育指導案を書く時に留意した点については、「子どもの行動予想」が保育所実習で23%、保育実習Ⅱで25%、「子どもの興味・関心」が保育所実習で26%、保育実習Ⅱで19%と多く、「子どもの発達」「時間配分」「わかりやすさ」等が挙げられていたが、保育実習Ⅱの方が、11項目と留意点がより多くなっていたことがわかった。これも、2006-2007年度の調査結果とほぼ同様であった。

また、保育指導案が実際にうまくいったと約7割の人が受け止めており、保育指導案の良かった点は、保育所実習では「子どもの興味関心をとらえた（87%）」「内容や材料の工夫（10%）」「時間配分（3%）」が挙げられ、保育実習Ⅱでは「子

どもの興味関心をとらえた(76%)」「創意工夫(10%)」「活動の流れ(8.5%)」「子どもの動き(6%)」が挙げられていた。

一方、保育指導案で反省する点は、保育所実習でも保育実習Ⅱでも「時間配分」「予想外の子どもの行動」であった。保育所実習では「伝達」「活動の流れ」「準備不足」といったことが挙げられ、保育実習Ⅱでは「説明・援助」「創意工夫」「子どもの全体と個」等といった保育の方法の質を問う項目が多く挙げられていた。これも、多い項目の順や内容は、2006-2007年度と同様の結果であった。また、「子どものかかわりで困ったこと」では、どちらの実習でも約6割が「子どもの葛藤時の対処」であり、「個へのかかわり」「子どもの態度」の順に多かった。

各実習での学びと今後の課題について、どちらの実習でも最も多く挙げられたのは「子どもへのかかわり」であり、保育所実習で34%、保育実習Ⅱで27%であった。続いて、保育所実習では「保育士の仕事理解」「積極性」「子どもの発達理解」「保育の知識」「保育実技」「部分と全体の把握」「創意工夫・準備」「葛藤時の子どもへの対処」「健康・安全管理」の項目が挙げられていた。保育実習Ⅱでは、「積極性」「遊びの工夫」「子ども理解」と続いており、より子ども理解に基づいた保育者のあり方を模索している様子が伺えた。これも、2006-2007年度の調査結果と同様であった。

(2) 現場評価項目に沿った成績評価と学生の自己評価について

保育実習の現場評価は、注1)の抽稿に示した評価表によるが、その項目は、大きく「勤務の状況」「実習中の態度」「実習ノートの記述」「指導能力・実際の援助活動」「保育者の資質」である。そのうち、特に分析の対象としたものは、「実習中の態度」「指導能力・実際の援助活動」「保育者の資質」に分類される。

自己評価については、自己評価表の25項目を現場評価項目によって分類し再度集計、分析した。その分類の際、現場評価の項目の説明事項に従い、「実習中の態度」については自己評価項目1,2,11,12,13,14、「指導能力・実際の援助活動」では自己評価項目3~10と15~25までとした。ここで示した図は2007-2008年度の調査結果であり、2006-2007年度の調査結果と大きく変わることはなかった。そこで、表1に示した2007-2008のデータをもとに後述の分散分析を行った。現場評価も自己評価も、5段階で5点を最も良いとしている。

2007年度(保育実習Ⅰ)の学生による自己評価、2008年度(保育実習Ⅱ)の学生による自己評価、2007年度(保育実習Ⅰ)の現場評価、2008年度(保育実習Ⅱ)の現場評価の平均は、表1に示した数値からもわかる通り、学生の自己評価に関する2007年度と2008年度との平均値の差は大きい、現場評価に関する2007年度と2008年度

表1 評価点からみた2007-2008の保育園実習の学生による自己評価と現場評価

	2007 保育実習Ⅰ 学生自己評価	2008 保育実習Ⅱ 学生自己評価	2007 保育実習Ⅰ 現場評価	2008 保育実習Ⅱ 現場評価
実習中の態度	\bar{X} 3.32	3.86	3.32	3.63
	SD 0.82	0.92	0.82	0.77
指導能力	\bar{X} 2.81	3.82	3.18	3.38
援助活動	SD 0.72	0.88	0.72	0.69
保育者の資質	\bar{X} 2.53	3.78	3.49	3.64
	SD 0.77	0.87	0.76	0.94

との平均値の差はあまり大きくなかった。これらの平均値の差にはどのような関係があるのかについて検討するために、これらの平均の差の検定を行った。「実習中の態度」について、各項目の分散分析を行うと、 $F(3/511)=12.23$, $p<.01$ で統計上有意であった。「指導能力・援助活動」については、 $F(3/507)=39.04$, $p<.01$ であり、有意な差が見られた。「保育者の資質」についても、 $F(3/506)=42.05$, $p<.01$ で同様に有意な差が見られた。そこで、これらの3項目に関する保育実習Ⅰと保育実習Ⅱの評価の変化について、学生の評価、現場評価を5%水準で片側t検定を行った。

その結果、学生の自己評価に関しては、「実習中の態度」で $t=4.88$, $df=256$, $p<.01$, 「指導能力・援助活動」で $t=9.986$, $df=251$, $p<.01$, 「保育者の資質」で $t=12.19$, $df=254$, $p<.01$ であり、全て統計上有意な差が見られた。それに対して、現場評価に関しては、「実習中の態度」のみで、 $t=3.06$, $df=255$, $p<.01$ であり、有意な差が見られたが、他の2項目では有意な差が見られなかった。このように、学生の自己評価の変化には、学習過程による意味が見られる。また、「実習中の態度」に関しては、学生は自己評価が高く、現場評価は低いと捉えられるが、そのような結果が表れたのは保育実習Ⅱについてであった。

上記の結果から、次に各項目別に2007-2008年における2回の実習の評価について、具体的な考察を加えることにした。

「実習中の態度」では、図1と図2に示した通り、保育所実習で3点が50%だったのに対して保育実習Ⅱで28%、保育所実習で5点が9%だったのに対して保育実習Ⅱで28%であり、2回目の保育園実習で自己評価がかなり改善されている。

「指導能力・援助活動」では、保育所実習で3点が61%に対して保育実習Ⅱで29%、4点が保育所実習で13%に対して保育実習Ⅱで40%、5点が保育所実習で0%に対して保育実習Ⅱで24%となっており、自分ではよくできたと感じている

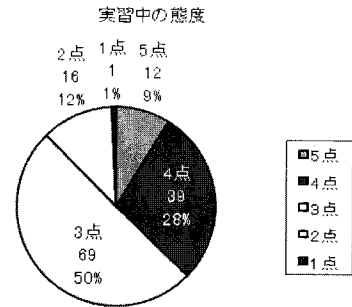


図1 保育所実習の実習中の態度：学生の自己評価

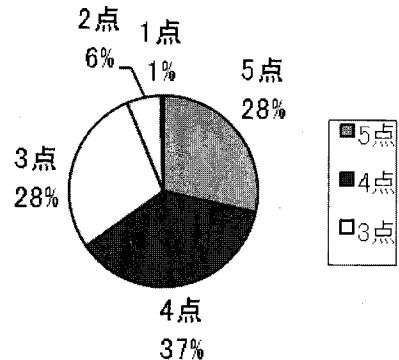


図2 保育実習Ⅱの実習中の態度：学生の自己評価

学生が増加したようである。しかも、平均点も、保育実習Ⅱの方がかなり高く、2回目の保育園実習で自信を持ったのだと読み取れるだろう。

「保育者の資質」については、2点が保育所実習で38%に対して保育実習Ⅱで7%、3点が保育所実習で45%に対して保育実習Ⅱで31%、4点が保育所実習で8%に対して保育実習Ⅱで40%、5点が保育所実習で9%に対して保育実習Ⅱで22%となっている。平均も保育所実習での2.5から保育実習Ⅱでの3.8へと高くなっているように、かなり改善され、自身に確信を持って行動できるようになってきたと言えるだろう。こうしたことが、各自の保育観の形成へと繋がっていくだろうと捉えられる。

「総合評価」については、図3と図4に示した通り、3点と4点に自己評価が2分されているところは2回の実習では同様であるが、自己を2点と評価する人が減少し、5点と評価する人は保育所

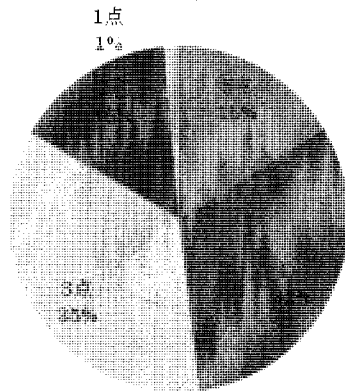


図3 保育所実習の総合評価：学生の自己評価

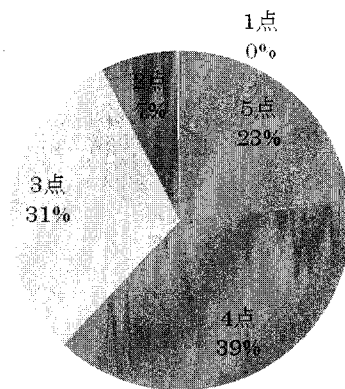


図4 保育実習Ⅱの総合評価：学生の自己評価

実習で16%であったのに対して保育実習Ⅱで23%と高くなっているため、全体の総合評価も2回目の保育実習Ⅱで少し改善されていることがわかる。

(3) 現場評価を基準とした保育所実習（保育実習Ⅰ）と保育実習Ⅱとの比較

ここでも、2007-2008年度の調査結果を示した。現場評価について、保育所実習と保育実習Ⅱとを比較すると、まず勤務の状況は普通より良いと評価された人が66%から72%に上昇していた。実習中の態度については、平均点が2回目の保育園実習で上昇しているだけではなく、普通より良いとされている人数も37%から55%に上昇している。どちらの実習でも、積極的な態度や熱意が求められていたが、2回目の実習の方が学生も社会的な態度を身につけていたようである。実習ノ-

トの書き方については、平均点はあまり変わらないが、普通より良いと評価された人が32%から43%に上昇し、学生の実践経験による学びの成果が見られたと言えるだろう。

指導能力・援助活動については、保育所実習で普通より良いと評価された人が26%だったのに対して、保育実習Ⅱでは40%に増加しており、2点と評価された人が減少した。この改善は、自己評価の結果と比較したときの意識のずれが変容していることにも表れている。保育所実習のとき、自己評価の平均は2.8点で現場評価は3.2点と自己評価の低さが見られた。しかも、保育所実習の時は、実習生らしい態度が求められ、それが指導能力・援助活動への評価にもつながっている様子が見られた。ところが、保育実習Ⅱでは、自己評価も現場評価もそれほど顕著な差はないが、学生の自己評価が現場評価よりも高くなっていた。それは、保育実習Ⅱで自身を5点と捉えた学生が24%いたのに対して、現場評価では5%であったことに表れていると言えるだろう。

保育者の資質については、現場評価はあまり変わらないが、指導や援助といった観点からよりもさらに自己評価が著しく改善されていることが平均点の変化から伺える。普通より良いと評価された人は、保育所実習で47%であったのに対して、保育実習Ⅱでは54%であった。

総合評価については、自己評価も現場評価もあまり変わらないが、少し自己評価の方が高くなっており、どちらも2回目の保育園実習で改善されていることが図3、図4、図5、図6からわかるだろう。

図7と図8では、外側の線が保育実習Ⅱであり、現場評価も自己評価も2回目の保育実習Ⅱの方が改善されていることがわかる。同時に、学生の自己評価では保育実習Ⅱで概ね良いと捉えられているのに対して、現場評価では保育実習Ⅱでの評価の改善が大きい一方で、指導・援助に関する評価が低いことが特徴であると言えるだろう。その原

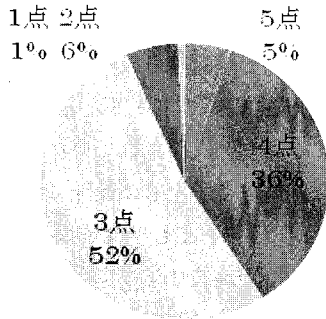


図5 保育所実習：総合評価（現場評価）

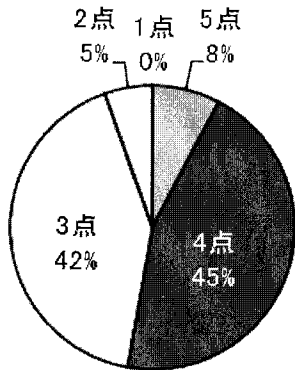


図6 保育実習Ⅱ：総合評価（現場評価）

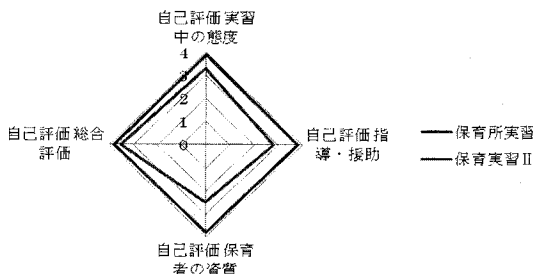


図7 3領域の保育所実習と保育実習Ⅱの自己評価の比較

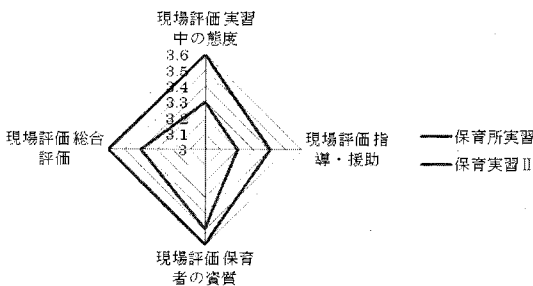


図8 3領域の保育所実習と保育実習Ⅱの現場評価の比較

因としては、保育経験の不足や社会性の未熟さが考えられる。

(4) 保育所実習から保育実習Ⅱへの意識の変容
 -2006年から2007年と2007年から2008年への比較を通して-

(3)に挙げた特に「実習中の態度」「指導能力・援助活動」「保育者の資質」といった3領域と「総合評価」について、2006年保育所実習で2007年保育実習Ⅱを受講した学生の評価や意識の変容を比較した。

その結果、2006-2007の学生については「実習中の態度」は自己評価の平均値が3.6から3.4へ、現場評価の平均値が3.2から3.6へと変化していた。これは、2007-2008の学生と類似した傾向が認められた。但し、自己評価について、2006-2007の学生が2回目の保育園実習で厳しくなっているのに対して、2007-2008の学生は自己評価が高くなっていた。

「指導能力・援助活動」について、2006-2007の学生の自己評価は平均値3.3から3.4へ、現場評価は平均値2.9から3.3へと変化していた。現場評価は2006-2007も2007-2008も改善しており、自己評価は2006-2007で平均値3.3から3.4へ、2007-2008では平均値2.8から3.8へと著しく高くなっていた。

「保育者の資質」について、2007-2008が自己評価が平均値2.5から3.8へと著しく高くなっているのに対して、2006-2007ではほとんど変化が見られなかった。現場評価で2007-2008があまり変化していないのに対して、2006-2007は平均値3.3から3.7へと高くなっていた。

「総合評価」について、自己評価は2006-2007まで変化がなかったのに対して、2007-2008では平均値3.5から3.8へと高くなっていた。現場評価は、2006-2007が平均値3.2から3.7へ、2007-2008が平均値3.4から3.6へと変化していた。

このように、特に3領域と総合評価の平均点だけで見ると、2006-2007の学生よりも2007-2008の学生の方が、「実習中の態度」「指導能力・援助活動」「保育者の資質」といった3領域において、保育実習Ⅱで自己評価が著しく高くなっていることがわかった。そのことによって、保育実習Ⅱの方が、「実習中の態度」に関して自己評価と現場評価との隔たりが大きくなり、「指導能力・援助活動」「保育者の資質」に関しては、自己評価と現場評価との意識のずれは大きいままであった。2006-2007の学生は、保育実習Ⅱによって自己評価と現場評価との意識のずれは小さくなる傾向にあった。加えて、2006-2007の学生は、現場評価よりも自己評価が高い傾向にあったのに対して、2007-2008の学生は、特に「指導能力・援助活動」「保育者の資質」に関して、初めての实習の時に自己評価が著しく低い傾向にあったが、2回目の保育園実習で自己評価が現場評価よりも高くなっていった。

こうした差異については、学生個々の実習体験が成功したと意識化されているかどうかにかかるところが大きいのであり、自己反省報告文書については、2006-2007と2007-2008の学生の意識は

は、「予想外の子どもの動き」に最も留意し、子どもの様子を想像し、活動の流れが「わかりやすい」ことに重点を置き、「指導保育者に相談」して指導を仰ぐという努力がされていた。それは、理論的知識に基づいて子どもの興味に合った活動やその保育的効果、子どもの発達段階等を自身だけで考えても、実践的な学びに至らないということを、一度目の実習で学生が感得したためだと推察される。そうして、自身だけの視点からだけではなく、様々なそして用意周到な計画を考えるために、指導保育士や子ども達との関係をより円滑にしていく努力をしたという、社会性における成熟度の深まりを読み取ることができるだろう。

(5) 現場評価に基づいた保育所・保育園実習に必要な要素

これまでの調査を踏まえて、保育所実習の評価を構成する要素について分析、検討することにした。今回、自己評価表25項目のうち、必要だと考えられる項目も選択してもらっており、それらを集計し、要約した。

i) 「実習中の態度」に必要な要素

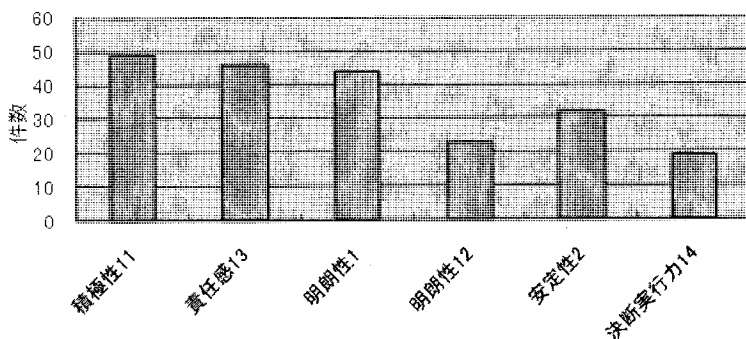


図9 保育実習Ⅱ 自己評価 実習中の態度の必要項目 (2007-2008年度)

類似していると読み取れた。

保育所実習では、「子どもの行動の予測」をしてはいても予想外の子どもの行動を多面的に考えるに至らない傾向にあった。しかし保育実習Ⅱで

図9に示したのは学生が「実習中の態度」の必要項目として挙げたものであり、学生の今後の課題ともなっていることである。これは2つの実習共に言えることであった。

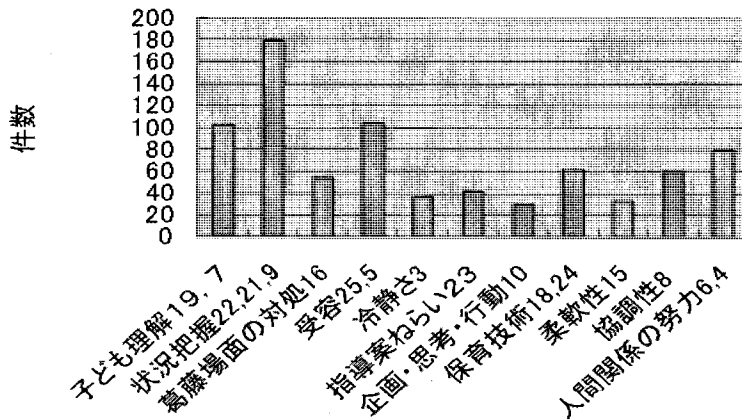


図10 保育実習Ⅱ 自己評価 指導能力・援助活動の必要項目（2007-2008年度）

ii) 「実際の指導能力・援助活動」に必要な要素

保育所実習でも保育実習Ⅱでも、学生が最も必要であると考えたのは「状況把握」であり、自己評価項目 22,21,9 に相当する。また、「子ども理解」（自己評価項目 19,7）や「受容」（自己評価項目 25,5）を基本として「人間関係の努力」（自己評価項目 6,4）ができること、「葛藤場面の対処」（自己評価項目 16）、「協調性」（自己評価項目 8）や、「保育技術」（自己評価項目 18,24）が必要な要素であると考えていることがわかった。他には、「冷静さ」（自己評価項目 3）、「指導案ねらい」（自己評価項目 23）、「企画・思考・行動」（自己評価項目 10）、「柔軟性」（自己評価項目 15）といった具体的な自己評価による反省に基づいた要素が見られた。特に、自身がかかわっている保育場面の部分と全体を把握しながら臨機応変に対処する能力が、指導能力として重視されていることがわかった。

図10に示したように、保育実習Ⅱで学生が最も必要であると考えたのは「状況把握」であり、保育所実習の際と同様である。次に、まず子どもを「受容」することが本質的であると捉えられており、「子ども理解」と「人間関係の努力」が挙げられている。これらは、実践的な学びを通してこそ体得できる人間的な成長を示していると考え

られる。ここで示された必要項目の内訳は、次の通りである。

「状況把握」は、自己評価項目 22,21,9 に相当する。また、「受容」（自己評価項目 25,5）を基本として「人間関係の努力」（自己評価項目 6,4）、「子ども理解」（自己評価項目 19,7）や「保育技術」（自己評価項目 18,24）、「葛藤場面の対処」（自己評価項目 16）、「協調性」（自己評価項目 8）、「指導案ねらい」（自己評価項目 23）,さらには、「柔軟性」（自己評価項目 15）、「冷静さ」（自己評価項目 3）、「企画・思考・行動」（自己評価項目 10）,といった具体的な自己評価による反省に基づいた要素が見られた。

こうした学生の学びの意識は、2006-2007と2007-2008で同様の結果が見られた。

iii) 「保育者の資質」に必要な要素

保育所実習で「保育者の資質」に必要なと考えられた要素は、「かかわりの姿勢」（自己評価項目 4,5,6,9,15,17,21,22）,「保育・教育についての考え方」（自己評価項目 16,18,24,25）,「感性」（自己評価項目 10,19,23）,「動作」（自己評価項目 7,20）,「表情」（自己評価項目 3,7）,「子ども好き」（自己評価項目 8）に要約された。中でも学生は、「かかわりの姿勢」「保育・教育についての考え方」「感性」を重要であると捉えていた。自己評価項目の必要件数から、学生は「的確な状況把握によ

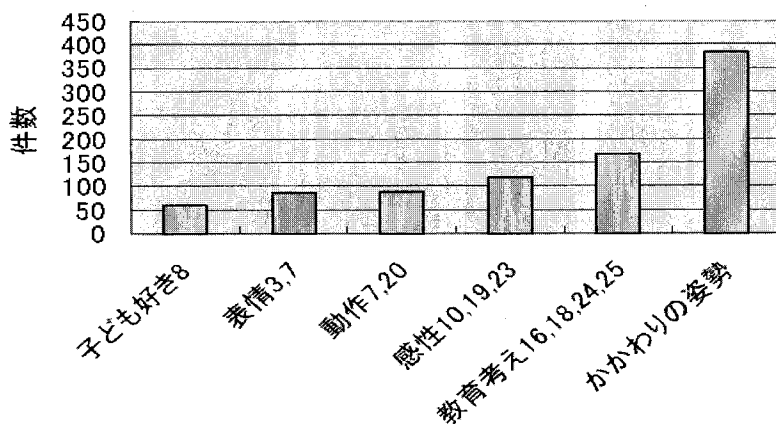


図11 保育実習Ⅱ 自己評価 保育者の資質の必要項目 (2007-2008年度)

る積極的なかかわりの姿勢が必要である」と考えていることがわかった。

保育実習Ⅱでは、「かかわりの姿勢」(自己評価項目 4,5,6,9,15,17,21,22),「保育・教育についての考え方」(自己評価項目 16,18,24,25),「感性」(自己評価項目 10,19,23),「動作」(自己評価項目 7,20),「表情」(自己評価項目 3,7),「子ども好き」(自己評価項目 8)に要約された。中でも学生は、「かかわりの姿勢」「保育・教育についての考え方」「感性」を重要であると捉えていた。自己評価項目の必要件数から検討すると、学生は、積極的な「かかわりの姿勢」が必要であり、保育者としての信条や感性がそれに伴うものであると考えていることがわかる。

どちらの実習においても「子どもへのかかわりの姿勢」は重視されていたことから、子どもに主体的にかかわることの重要性を学んでいたと考えられる。また、2006-2007の学生も2007-2008の学生も同様の結果が得られた。

さらに、この保育所実習、保育実習Ⅱにおける現場評価の構成要素間との関係と自己評価の構成要素間との関係について、定量的分析を行った結果を比較考察した。

(6) 保育所実習、保育実習Ⅱの評価における構成要素間との関係について

i) 現場評価における特徴

定量的分析は、次のように実習評価の構成要素を要約・分類してその特徴を抽出するために、主成分分析とクラスター分析を行った。

「保育所実習」では、主成分分析結果から、第一主成分を「子どもの本質的な理解」、第二主成分を「柔軟性」、第三主成分を「子どもへの親和性」と推定した。クラスター分析は、初期値を1として平方ユークリッド距離でグループ間平均連結法を用いて行い得られたデンドログラムによれば、「実際の指導能力・援助活動」は、「実習中の態度」「保育者の資質」「総合評価」との間に距離があり、現場評価でも「実習中の態度」が「保育者の資質」と最も関連し、その経過によって総合評価が左右されていると考えられた。「実際の指導能力・援助能力」は、「保育者」としてではなく「実習生」としての学習過程と捉えられていることがわかる。それは、主成分分析の結果からも言えるだろう。基本的な「子ども」理解をもとに柔軟に親和的な態度がとれているかどうか、現場評価の重要な判断基準となっていると読み取ることができよう。

「保育実習Ⅱ」では、主成分分析結果から、第一主成分を「積極性」、第二主成分を「主導性」、第三主成分を「社会性」と推定した。

クラスター分析では、「実際の指導能力・援助

活動」は、「実習中の態度」「保育者の資質」「総合評価」との間に距離があった。現場評価では「保育者の資質」と「総合評価」とは近い距離にあり、次に「実習中の態度」が結合していた。「実際の指導能力・援助能力」は、1回目の実習時よりは評価の対象となっているものの、「実習生」としての自覚と意欲を問うものであることがわかるだろう。保育への積極的なかわりと主導性が、現場評価の重要な判断基準となっていると読み取ることができよう。

ii) 学生の自己評価の特徴について

「保育所実習」では、前述の学生の自己評価 25 項目についても、現場評価の分析と同様の手法を用い、学生の選択した必要項目件数によって、評価の特徴を抽出した。主成分分析結果では、第一主成分「問題解決力」、第二主成分「平常心」、第三主成分「指導・実行力」であった。さらに、25 項目の評価の要素をクラスター分析すると、25 要素は大きく 6 項目に類別できた。「協調性」とそれ以外の要素にまず大きく二分された。それは、保育に直接関わる項目かどうかによって距離が生じたと言える。次に、「柔軟性・適応力」に要約できる 6 要素、「問題解決力」に要約できる 5 要素、「子どもへのかかわり」の 6 要素と「保育技術」は、「平常心」3 要素、「子ども理解」3 要素と 2 分された。前者は判断・行動力の意味を持ち、後者はその判断や行動のために必要な保育者としての基本的態度を意味していると考えられる。このクラスター分析と上記の主成分分析の結果から、主に指導・援助に関わる「問題解決力」と「平常心」といった視点から実習の自己評価をしていることが読み取れる。

「保育実習Ⅱ」では、主成分分析の結果、第一主成分「積極性・創意工夫」、第二主成分「冷静さ」、第三主成分「受容性」が抽出された。クラスター分析によれば、25 要素は、大きく項目 8 「子ども好き」とそれ以外の要素とにまず大きく二分された。それは、保育に直接関わる項目かど

うかによって距離が生じたと言える。次に、「計画性」、「明朗性」の 2 要素、「状況把握力」の 4 要素、「受容力・安定性」の 3 要素、「創意工夫・問題解決力」に要約できる 6 要素、「主導性」の 3 要素、「積極性」に要約できる 5 要素に細分化された。そのうち、「計画性」、「明朗性」の 2 要素、「状況把握力」の 4 要素、「受容力・安定性」の 3 要素、「創意工夫・問題解決力」に要約できる 6 要素は、保育の方略に繋がるものとして分類できる。「主導性」の 3 要素、「積極性」に要約できる 5 要素は保育者としての主体性、援助行動に見られる指導性の側面として捉えることができるだろう。こうした二側面は、学生が自己評価の基準としている保育者としての資質に包括されるものであり、「子ども好き」という側面とは必ずしも両立しないことを、学生はこのたびの実習で痛感したものと推察できる。これらの結果と主成分分析の結果から、「積極性・創意工夫」といった保育者の仕事に関する理念を読み取ることができる。これらについては、2006-2007 年度、2007-2008 年度の学生ともにほぼ同様の結果が得られた。

iii) 現場評価と学生による自己評価の差異

保育所実習では、i) に示した通り現場評価の特徴は、保育実践現場における保育実習という学生に対する教育的態度が表れていると言えよう。保育の基本としての子どもの理解を深めること、子どもへの親和的な態度の形成、といった保育者の資質を構成する要素が実習中に培われていったかどうか、今後への期待を含めて評価されていることがわかる。一方、ii) に示した学生による自己評価の特徴は、主に実際の指導・援助能力に関わる要素に判断の基準があった。そのことは、25 項目のうち学生が選択した必要項目件数にも反映されていたが、2007-2008 の学生以外について、自己評価は現場評価よりも高い傾向にあった。「実習中の態度」については、現場評価と自己評価との差異はそれほど見られなかったが、「指導

能力・援助能力」については、2006-2007の学生では自己評価の方が高かった。

それに対して保育実習Ⅱでは、i)に示した通り現場評価の特徴は、保育実践を通した学びとして、学生に積極的な態度と保育における主体性をどのように社会性として表現できるかを判断するところにあったと言えよう。ii)に示した学生による自己評価の特徴は、保育所実習と同様に主に実際の指導・援助能力に関わる要素に判断の基準があった。特に、「創意工夫・問題解決力」といったすぐには獲得できない要素は、学生自身が指導保育士の保育活動から読み取った理想の保育者像のあり方を示唆していると考えられる。低い評価ほど「指導・援助能力」よりも「実習中の態度」の消極性を見られていることがわかった。現場評価と自己評価との相違点は、1回目の保育所実習の際とは質的に異なっており、現場評価は高くなってはいる。但し、「指導能力・援助活動」については、自己評価は二分されていた。

次に、学生自身が保育所実習と保育実習Ⅱでどのように実践的学びの効果があつたのかについて意識化されたことについて考察する。

iv) 学生自身による保育所実習と保育実習Ⅱの比較²⁾

「自身で頑張った良くてきたと思う点は、2回目の保育園実習で変わったかどうか」については、98%の学生が変わったと回答していた。ほとんどの学生が保育実習Ⅱの方がよくできたと捉えているが、どのような点にそれが見られるかについて、図12のような回答結果が得られた。

最も回答件数が多かったのは「積極性(33.8%)」であり、これは実習の経験回数が増すほど実践的な学びについて意欲的になるという教育的効果を意味していると言えるだろう。続いて今後の課題ともなっている「子どもへかかわり(11.3%)」「冷静さ(9.4%)」「保育内容(7.5%)」「明朗性(6.9%)」「子どもの発達理解(5%)」「設定保育(5%)」等が挙げられる。実際、保育所実習では

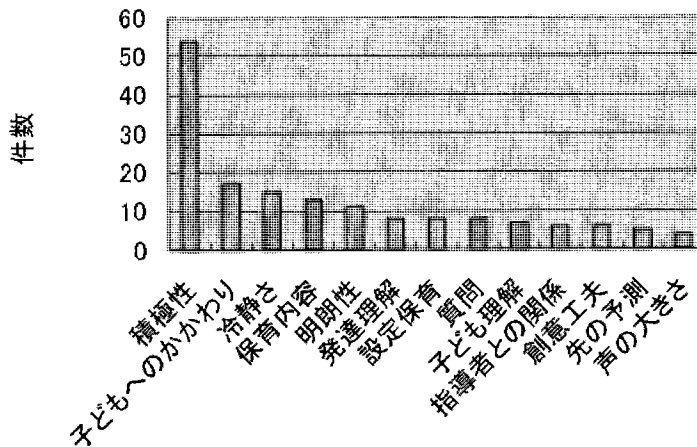


図12 保育実習Ⅱの方がよくできたと思う点(2007-2008年度)

2) 学生自身による保育所実習(保育実習Ⅰ)と保育実習Ⅱとの比較項目は次の通りであった。

<保育所実習と保育実習Ⅱの学生の自己評価比較>

- (1) 自身で頑張った良くてきたと思う点は、2回目の保育園実習で変わったか
- (2) 保育実習Ⅱの方がよくできたと思う点
- (3) 自身の課題だと思うところが2回目の保育園実習で変わったか
- (4) 自身の課題は保育実習Ⅱでどのように変わったか
- (5) 教育実習に向けての抱負

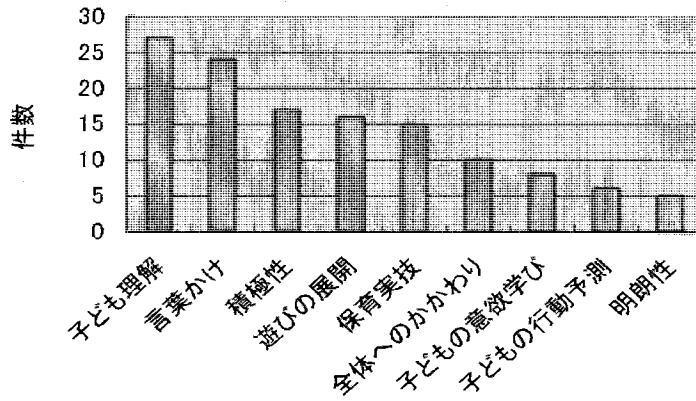


図13 保育実習Ⅱで変わった課題（2007-2008年度）

低年齢児を担当する人が多いのに対して保育実習Ⅱでは3, 4, 5歳児を担当する人が多く、2回の保育園実習で様々な年齢の子どものかかわり方を体験することで実践的な学びが広がるという教育的効果も見られていることが、2006-2007と2007-2008の学生の両方の意識調査の結果からわかった。

「自身の課題だと思うところが2回目の保育園実習で変わったかどうか」については、83%の学生が変わったと回答している。

自身の課題はどのように変わったかということに関して、その課題を必要と考えることについては理解しているつもりであったが、いざ実際に実践現場に臨むと、自身の自信のなさや心の余裕のなさから冷静さに欠け、課題としていた子ども

へのかかわりにおける指導的機能にとらわれていたということが自由記述に多く見られた。

しかし、図13からわかるように、保育実習Ⅱで変わった課題として「子ども理解（21.3%）」「言葉かけ（18.9%）」「積極性（13.4%）」「遊びの展開（12.6%）」「保育実技（11.8%）」等が挙げられている。まず、子ども理解を深める努力をし、どのように適切な言葉かけをするのか、そして子ども達の遊びの展開を考えていくといった具体的でありながら子どもへのかかわりを模索する保育者としてのあり方の追究へと向かう態度へと変容していることがわかる。これは、直面した保育場面によって考え判断し実行する力の形成へとつながっていると捉えることができるだろう。

さらに、今後の幼稚園教育実習に向けて図14

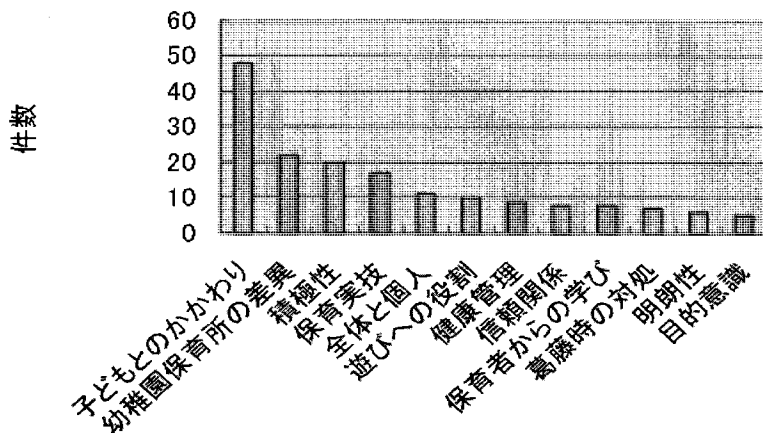


図14 教育実習に向けての抱負（2007-2008年度）

に示したような抱負を抱えていることがわかった。それによれば、「子どもとのかかわり (27.5%)」「幼稚園と保育所の保育の差異 (12.9%)」「積極性 (11.7%)」「保育実技 (9.9%)」「全体と個人を捉える (6.4%)」「遊びの役割について考える (5.8%)」となっている。これは、図 13 で示した保育実習Ⅱで変わった自己の課題に基づいているものであった。子どもに積極性を持ってかかわる必要があるが、同時に子どもも主体の保育であるべきだという理念から、「子どもとのかかわり」について学びを深め、これまでの保育園実習と今後の幼稚園教育実習での実践的学びの過程を通して両者の差異を明らかにしたいと考えていた。また、割合としては決して多くないが、「目的意識」を具体的に持って実習に臨みたいという実践的な学びへの意欲の高まりも見られた。こうした学びの深まりの過程において、2回の保育園実習経験による教育的効果を読み取ることができるだろう。

考察のまとめ－2006－2007年度と2007－2008年度の学生による保育所実習と保育実習Ⅱの評価の考察から－

保育所実習における自己評価は、学生にとって主に子どもの個性や発達の理解、子どもへの接し方、保育技術を習得することにあつた。その「学び」については、学生自身の今後の課題ともなっていた。一方、現場評価では、保育者としての基本的態度が形成されているかどうか判断基準があつたと考えられる。各実習園での実習経験内容・指導内容・方法の多様性によって、実習日誌の記録も異なり、現場による実習評価の基準も一定ではないという実態もある。

保育実習Ⅱでの自己評価は、本来の理論と実践の統合と内面化というばかりでなく、類似した経験を積み重ねることによる試行錯誤と保育者の資質を体験によって自ら感得することにあると捉えることができるだろう。学生は、保育実習Ⅱでは、

特に指導保育士の保育活動の過程を落ち着いて観察学習していた。「積極性・創意工夫」「冷静さ」「受容性」といった要点は、保育士に共通の保育者として不可欠の資質であると学んだのである。2回の保育園実習における実践経験を通して、さらにどのような保育活動が展開できるのか、子どもとのかかわりを具体的な保育場面を鮮明に思い浮かべながら自己評価し、課題を発見していると言えるだろう。このたびの調査結果から、2回の実習を経てもなお、学生による自己評価と現場評価との意識のズレは特に実際の「指導能力・援助活動」に見られるが、少しずつ学生の態度や目標が明確になるにつれて自己評価も現場評価も改善されていっていることがわかった。こうした考察の結果から、2回の保育園実習の教育的効果捉えられたと考える。

また、実践的な学びは、学生の社会性の成熟度や知識量、その他の諸経験によって質的に異なってくるので、それらの諸要因について明らかにしていくことを今後の課題としたい。

参 考 文 献

- 相浦雅子、高濱正文、那須信樹、原孝成、野中千都 (2008)『『保育実習指導のミニマムスタンダード』を軸とした保育所実習指導の実践に関する研究－九州管内保育士養成施設における保育所実習指導の実態調査を通して－』別府大学短期大学部紀要 27巻 pp. 77-87.
- 権藤真織 (2007)「保育実習における実習日誌の記述内容と実習成績との関連－学生自身による日誌の内容分析学習を通して－」近畿大学豊岡短期大学論集第4号, pp. 39-47.
- 日吉佳代子、若山剛 (2005)『保育所実習』樹村房.
- 飯野祐樹、七木田敦 (2008)「保育科専攻の学生における保育の「ふり返り」に関する研究」幼年教育研究年報第30巻, pp. 121-128.
- 加藤和子 (2008)「自己覚知の促進に焦点をあてた保育実習事後指導の試み」聖和学園短期大学紀要 45, pp. 63-71.
- 松本学 (2007)「教育実習・保育実習における学生自己

- 評価と幼稚園評価・保育所評価の比較考察」国際学院埼玉短期大学研究紀要(28) pp. 63-72.
- 松本学(2008)「教育実習・保育実習における学生二年間の学生評価の考察」国際学院埼玉短期大学 29 巻, pp. 57-80.
- 岡本雅子(2005)「保育実習事前事後指導に関する一考察」関西女子短期大学, 通号 29, pp. 56-60.
- 岡本雅子(2006)「保育実習・事前事後指導の一考察—社会的スキルの視点から—」関西女子短期大学, 16 号, pp. 21-30.
- 大森弘子(2007)「佛教大学における保育実習教育に関する一考察—保育実習の資質向上をめざして—」福祉教育開発センター紀要, (4) pp. 23-24.
- 斉藤葉子, 大木みどり(2008)「実習の事前・事後指導に関する研究(Ⅳ)—保育実習における1・2年次学生の不安意識とその問題について—」羽陽学園短期大学紀要 8 巻(2) pp. 183-202.
- 榎原博美(2007)「保育実習指導の内容に関する客観的分析」名古屋女子大学紀要 53(人・社) pp. 189-195.
- 佐野(2008)「保育所実習(保育実習Ⅰ)における実習評価に関する一考察—現場評価と自己評価の比較分析を通して—」人間科学部研究紀要第7号 pp. 131-147 の 131-132 頁の先行研究の検討と 144-145 頁の参考文献.
- 佐藤匡(2005)「学生の教育・保育実習に関わる二, 三の問題についての調査(2) 実習の経験は学生の「保育の質」に対する見方をどう変えるか?」聖和学園短期大学紀要(42) pp. 13-29.
- 山田秀江(2008)「保育実習Ⅱにおける責任実習に関する事前指導について(2)」四條畷学園短期大学 41, pp. 47-58.

An educational effect by practical learning about practical training in nursery school for two times

—Based on the findings about self-evaluation and on-site evaluation concerning practical training I and practical training II from 2006-2008year—

Osaka Shoin Women's University
Mina SANO

ABSTRACT

About the various learning of the student in the nursery school training, I understood that self-evaluation was high in childcare training I about the student of this university in particular from the analysis such as introspection report documents till now. It reflects consciousness of the learning in the training of student oneself, and it is not evaluation for the result of the real childcare practice.

The purpose of this study was to consider how the practical learning in the nursery school brought an educational effect to the students through comparison analysis of the self-evaluation and the on-site evaluation in two times of training of 2 cycles for childcare training I and II. The findings about two times of training of 2 cycles were resembled. I tried to clarify it about an educational effect of the nursery school training of the twice through what I mainly analyzed about the diverse aspects of the change concerning the self-evaluation and the on-site evaluation about the nursery school training twice of 2007-2008 year. As a result, I found out a difference of two times of learning about the practical training and the transformation of the evaluation by clarifying the students' sense of purpose.

Keywords: self-evaluation, on-site evaluation, practical training in the nursery school, educational effect.